

表紙, 目次, 通信

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38577

明治三十八年六月二十五日發行

十全會雜誌

全澤醫齒學專門學校十全會

第三十八號

（非賣品）

十全會雜誌第三十八號目次

○原著及實驗

○MaligneHyernephrom (悪性副

腎腫)ノ一例

特別會員 渡 孚 貞

○遺傳 (Vererbung)

醫學博士 金子 治 郎

○咽頭扁桃腺肥大症ノ切除ニ依テ

治愈セル夜尿症ノ三例

特別會員 本 田 三 郎

○アクチノミコーゼ患者及標本ノ

デモンストラチオン

特別會員 三 股 梅 吉

○黒水熱ニ就テ

特別會員 中 川 幸 庵

○會 報

○叙任及辭令○本校紀念日○大茶話會○日本海大海戰祝賀提灯行列○十全會第五回講話部大會○金子博士學位授典祝賀會○十全會柔道部実稽古及大會○木村下賜○故萩野隆光君肖像及題辭○第二回軍資献金○御斷り○編輯日誌

○通 信

○佐々木教授伯林第二報○大坂に於ける第二回同窓會○吉川砥直君通信の一節

○會 告

○三十八年度十全會經費豫算書○十全會々則改正の件○寄贈及交換書目○會費領取 此外廣告數件



生等現職ヲ執リテヨリ已ニ一年、誌ノ成ルモノ四、徒ラニ先任諸賢ノ舊路ヲ摸索スルニ汲々トシ、己レノ職責ヲ全フシテ諸君ノ囑望ニ應フルナク、衷心甚タ慚愧ニ堪ヘズ、今筆ヲ擱キ任ヲ去ルニ臨ミ、一言以テ會員各位ノ寬恕ヲ仰ク、

明治三十八年六月

十全會雜誌部員一同

會報

○叙任及辭令

任陸軍三等軍醫

(三月二十七日)

仙波昌秋

任陸軍三等軍醫

江藤潤一

任陸軍三等軍醫

高伊三郎

任陸軍三等藥劑官

(以上四月九日)

臼井順太郎

任陸軍二等軍醫

陸軍三等軍醫正八位

小西俊三

任陸軍二等軍醫

陸軍三等軍醫正八位

辻本辰之助

任陸軍二等軍醫

陸軍三等軍醫正八位

宮井勇

任陸軍二等軍醫

(以上四月十日)

田中秀夫

三級俸下賜

金澤醫學專門學校教授

大西克孝

金澤醫學專門學校教授

大西克孝

文官分限令第十一條第一項第四號ニ依リ休職ヲ命ス

(以上四月二十六日)

叙正六位

從六位醫學博士

金子治郎

叙從六位

正七位

宮田篤郎

叙正七位

從七位

石川喜直

(以上四月二十一日)

任陸軍三等軍醫

各通

山本幹雄	池田恒太郎	朝倉重敏	下村義二郎	前田豐作	後藤義賢	宮崎稻作	伊藤禮二	太田友市	河崎有作	堤泰造	中村惠	綾部讓	富家久男	阿部可一	諸橋嘉久次	稻坂清八	富田敦貴	笠雋吉郎	林豐丈	堀田圭三	本濃觀造
------	-------	------	-------	------	------	------	------	------	------	-----	-----	-----	------	------	-------	------	------	------	-----	------	------

第十卷雜誌第八十八號

任陸軍三等藥劑官
任陸軍二等藥劑官

熊野勉造
伊藤昌平

月俸金貳拾圓給與
月俸金貳拾圓給與

中島誠
中島喜作
片山良作

任陸軍三等軍醫
任陸軍二等軍醫

井上只次
溝口美代次

月俸金貳拾圓給與
月俸金貳拾圓給與

村上庄太

任陸軍三等軍醫
任陸軍二等軍醫

濱地藤太郎
村良吉

四月一日ヨリ日數十三日間ノ豫定ヲ以テ病理學取調ノ爲
メ東京及千葉宮城ノ二縣下へ出張ヲ命ス

石川喜直

依願免職務
依願免職務

寺田久十郎
河合忠次

四月一日ヨリ日數十二日間ノ豫定ヲ以テ解剖學取調ノ爲
メ福岡醫科大學及長崎醫學專門學校へ出張ヲ命ス

高安右人

依願免職務
依願免職務

岡田剛平
佐川忠茂

出京ヲ命ス

金澤醫學專門學校校長醫學博士

青木恭太郎

金澤病院醫員ヲ命ス
月俸金拾八圓給與

谷口長松

體操副科教授上取調ノ爲メ京都市へ出張ヲ命ス

小原芳雄

月俸金參拾圓給與
月俸金貳拾圓給與

八田智證
猪木彥助

爾今月俸金貳拾圓給與
爾今月俸金貳拾圓給與

野崎芳孝

月俸金貳拾圓給與
月俸金貳拾圓給與

計見雄藏
關啓次郎

爾今月俸金拾貳圓給與

中野鑄太郎

月俸金貳拾圓給與

林篤

爾今月俸金拾貳圓給與

中野鑄太郎

(五月六日石川縣)

(四月十二日石川縣)

(以上三月二十九日石川縣)

(以上六月六日)

(以上五月三十日)

(以上五月三日石川縣)

(以上五月一日本校)

內科學副手ヲ囑託ス
醫學得業士 計見雄 藏
(月手當金貳圓給與)

外科學副手ヲ囑託ス
醫學得業士 上野 忠
(月手當金貳圓給與)

外科學副手ヲ囑託ス
醫學得業士 關 啓次郎
(月手當金貳圓給與)

依願解雇
五月八日本校
雇堀内茂成

雇申付
月俸金拾貳圓給與
五月十二日
崎田誠四郎

藥學科副手ヲ囑託ス
藥學得業士 大櫛 秀松
(月手當五圓給與)

依願囑託ヲ解ク
產科學婦人科學副手 八田 智証
五月三十一日本校

婦人科學產科學副手ヲ囑託ス
醫學得業士 猪木 彦輔
(月手當金貳圓給與)

醫學科第四年級長ヲ命ス
教授 山 碕 幹
本學年間懲罰委員ヲ命ス 金子 治郎
(以上五月二日本校)

會計課員兼圖書課員ヲ命ス
雇 崎田誠四郎
圖書課員ヲ免ス 教務課兼圖書課員 宇野 益之
(以上五月十五日本校)

○本校紀念日。五月十一日午前九時濟々堂に於ての式を舉げられたり。

○大茶話會。全日紀念式後直ちに大茶話會を開かる、まじめでしやれた演說、菓子が多からぬので小茶話會だといふ演說、例の新富座一連の講談等あり十二時おめで度散會したり。

○日本海大海戰大捷祝賀提灯行列。六月四日午後六時の豫定を以て我校特有なる嚴肅のろの行列を催し雨城氏が作歌と樂隊とは能く金城百萬の人士をして志氣鼓舞せしめたり。猶ほ豫備病院入院患者を慰撫したるの故を以て後日全院長より會長高安博士に向け謝狀を寄せられたり。

海戰大捷祝賀提灯行列の歌

黒雲すびくなりゆきて
たいさへ暴き北風に
敵の艦陣 敷れほく
鯨鯨ふかくかくれたり
八洲をめぐる大瀛の
浪に生れし益良雄が
父祖建國の義をうけて
劔とる手の勇ましや

二

君の御詔を畏みて
進む皇軍の旗かぜに
見よ豺狼の血み飢て
運命はもろき鷺の旗

砲煙彈雨も何のその
靡かぬ敵のあるべきや
平和をみだす敵國の
筑紫の海に影うせぬ

三

嗚呼東海の一孤島
異國人もあふくなる
谷鳴り山のどよみまで
翳せる灯うち上げて

史は百王の跡遠く
皇國の幸を祝はずや
凱歌のさけび空高く
祝へ同胞五千萬

(野村雨城作)

○十全會第五回講話部大會

五月十三日午前正八時開會との廣告を以て五十分過ぎて
の開會、講演中の概要左の如し

會長 高安 教授

第一席、人類の地位。 中村欣一郎君

人類學研究に興味を有する君の講演なれば全人間に於
て一方ならぬ喝采を以て迎へられたり。

第二席、下顎關節の運動。 玉森法靈君

下顎關節の運動に就き幾何學上の公式を應用して開口
閉口の軌跡を求め咀嚼に對する一種動物と異なる作用あ

りと論証せられたり。

第三席、遺傳。 金子 教授

蘊蓄深き講演なれば本日中第一の大立物として滿堂崩
れんばかりの拍子を以て迎へられたり。(委敷は原著
欄を見らるべし)

第四席、ゴノコツクス。 龍田恭齊君

三分間の小演說要するに淋疾の概略に過ぎざるは遺憾
なりき。

第五席、植物蛋白を以て動物蛋白に代へ得(營養の意味
に於て) 上田 教授

教授自らが植物蛋白即ち豆蛋白を以て動物蛋白に代用
されて幾分の害なく却て營養を能くせしと云ふ研究談
なりき且つ添へて云える、には我國の如き小島嶼にて
人々多き國は勢ひとして安直にして十分の營養を取り
得る様計らざるべからずと是れ半面に於て國家的問題
として大價値ある所以ならずや、猶ほ他日論文として
提出するの期あるべしとて壇を下られたり依て詳敷は
他日を期して諸君に接するの榮あるを待つ。

第六席、バトロギー、テス、リンバストローメス。 佐々 榮君

流暢なる君が獨逸語を以ての講演標題の如し。

第七席、氣管枝に原發せる軟骨腫の供覽。

渡 講 師

小原芳雄氏徵兵検査の爲め歸國中にて本日は出席し難き旨同氏に代りて謝せられ尋いで本題に入る

先づ恩師村上教授が懇篤なる指導を與へられたるを感謝すと述べ夫より氣道下部殊に小なる氣管枝に原發する腫瘍は癌腫を除きては甚だ稀有のものなる事を「リテラツール」によりて立証せられ更に該部の原發性軟骨腫に就いて先例を列舉し又 Enchondrom 及 Ekechondrosis との區別を述べ進んで氏が一例に説き及ぼす。余が本日諸君に供覽せんとするものは Ekechondrosis に屬するものにて此總會席上に麗々敷報告するの價値はなからんも是とて他の部に生ずるものとの如く普通のものにあらず故に一覽し置かるゝも無益の事にはあらざるべし余が此腫瘍を得たる死体は小野慈善院より収容したるものにて土田某と云ふ六十九歳の老婆、本年三月十日に解剖せるものなり其生前の症狀全く不明にて之を諸君に紹介し得ざるは甚々遺憾の事に屬す勿論二三の内科書に依るも是に關するの記載なく唯氣管枝狹窄の原因條下に「腫瘍」の二字を見る位に過ぎざれば左程の障礙はなきものならん解剖の結果亦此腫瘍を有せる他に別段所見なし唯左卵巢に梅實大の囊腫一個あり又子宮は稍々萎縮し子宮腔部は消失し且つ外に及

び頸部に於ける腔は全く欠損し体部に狭小なる腔を遺殘せるのみなりき、左肺は全表面手を以て剝離し得べき軽度に胸壁と癒着し且つ氣腫を呈す而して下葉の中央に雀卵大の周圍より限局せる硬き一の硬結を觸る今其部を截開するに可なり太き氣管枝の内面より發生したる腫瘍にして其部の氣管枝は囊狀に擴張せり腫瘍の大さは大なる櫻實位にして稍々細長く表面は凹凸不正硬さ殆んど骨様、其基底は廣く氣管枝壁に連接せり而して斷面は稍々赤色を帶ぶ。氣管枝は左右両肺の者共に多少腫脹赤色を呈し粘稠なる膿狀液を附着せり即ち氣管枝加答兒を存するの他別に腫瘍の爲めに障礙を起したる如き痕跡なし蓋し氣管枝の擴張によりて代償せるものならんか。腫瘍を氣管枝壁一部と共に固定硬化し是れより切片を作り諸多の方法により染色して檢するに腫瘍附近の氣管枝壁及び周圍の肺組織は一汎に結締織増殖し壁の着しく肥厚せるを認む而して其間に多量の圓形細胞の浸潤あり尙腫瘍附近の氣管枝軟骨は甚々其排列不正となれり腫瘍表面は氣管枝粘膜の一系なる顛毛上皮を以て被はれ粘膜下結締織間には多數の血管を存在し且つ圓形細胞の浸潤せるを認む尙粘膜は所々に於て腫瘍内に深く陥入し之れを葉狀に分つ加之腫瘍内部に於ても結締織の爲めに數個に區劃せられ其中

に軟骨細胞を充實す軟骨の種類は勿論硝子様軟骨に屬すれども細胞の形状及び大小は甚だ一定せず其排列も亦頗る不正となれり。而して腫瘍内所々に可なり廣部の粘液様變生を起せる部あり又處々限局して細胞の形状著しく星芒形に變じ將に骨細胞に一致せる如き部あり此れに酷似せるものを嘗てLassater氏は報告されたり然れども余の例に於ては氏の例の如き澱粉様變生は兼ね居らざりき云々。

右に就き數臺の顯微鏡供覽ありたり。(渡講師の稿正を得たればその誤りなきを保証す)

第八席、一種の精神的疾患。 高野宗重君

滑稽演説にしてむしろ講談に近し、さる東京新聞の三面に於て見わたることありきと思ふがいかに。

第九席、負傷兵より摘出したる留丸の供覽。

宮田 教授

教授が金澤豫備病院に於て高安、山碕、下平諸教授と共に負傷兵の治療に従事せらるゝこと毎週五回に及びことに銃創に就て實見されたるを講演されたるなり講演時間に不足を告げ一半を次回に延はされたり

第十席、色素性網膜炎標本の「デモンストラチオン」

高安 教授

標本を得るに難き本症に對し博士が小野慈善院より送

り來れる六十七歳の男子の死体に就て得られたるを供覽せられたり、猶ほ「Der Bau der menschlichen Retina,」に就て詳細に説明されしを喜ぶ。

第十一席、標本の説明に就て。 金子 教授

再び演壇に立たれて留學中「アルバイト」の一部たる博士の製作標本に就て詳敷講演されたり、その數八。

第十二席、アクチノミコーゼ患者及び標本のデモンストラチオン。 三股梅吉君

君が宮田教授の外科室に於て研究されたる患者に就て深く獲たるものありて講演されしものなるが原著欄内に入れしを以て茲には省くことゝなしぬ。

第十三席、再び鼻茸及び鼻茸様肥大の副鼻腔膿症診斷的價値に就て附鼻茸の顯微鏡的標本のデモンストラチオン。

第十四席、咽頭扁桃腺肥大症切除によりて治癒せる夜尿症の三治驗附顯微鏡的標本のデモンストラチオン。

(原著欄に掲げたり)

以上二、 本田三郎君

閉會の辭 部長 上田 教授

かくて午後六時全く閉會されたり猶他に下平、石川、村上、山碕諸教授の講演なる筈なりしも時間のなき爲め難くを得ざりしは遺憾なりき。(雪生)。

○金子博士學位授與祝賀會

色は勾へど散りぬるものを、我世いづくに常あらんや、天は永遠に蒼々の姿を示せども、地は無窮に漠々の形を示せども、絶せぬ變化は黙々の中に勢をふるふ。星辰は稚兒なり、太陽は健兒なり、地球は老年なり、月魂は死なり、一滴水を剖かば幾億の生物を得べく、アミーバに寄生する動物の分子さへ多かれども、一として不死不滅のものはあらざるなり、空間は無極なり、時間は無限なり、而してあらゆる變遷活動は刻一刻だに休まず。然かも「自ら助くる者は天之れを助く」とか、至言なる哉、素より人間の事業たる手を袖にして得らるべき物にあらず、皆困難にあふて屈せず、安樂に處して逸せず、拮据勉勵勇猛進したる結果に外ならざるなり。今回我が恩師金子先生が光榮ある醫學博士の學位を得られたる、敢て故なきにあらず、其の萌す處挿拇の二葉ありて偶然にあらざる事、松田氏が式場に朗讀せられたる祝辭に爛かなり、生等黃嘴の輩徒らに蛇足の言を要せんや。とまれ先生が斯かる至大の榮譽を負はせられたる時、山海も雷ならぬ洪恩に浴するもの、誰か祝賀の意を表せざるべき。此に評議一決、醫員及び當金澤醫會員諸氏と共に、この盛典を擧ぐるに至りぬ。

○式

時やこれ五月十一日、恰も本校創立紀念日の佳辰に際し、時鐘二点を報すると共に集まり來る者、當日の正賓たる博士金子先生を始め、會員としては宮田、石川、湯目、金原の四先生、本校に縁故ある醫員及び醫師、軍醫の諸君、學生全体を合せて無慮六百余名。宏大を以て誇りたる會場も今やほどく余地を残さず。落花流水、九十の春光あへなく去りて、春恨自ら嘆ましむるものあり、嘗て朝暉の幽禽に歌はれ、朧夜の月光に照らされたる花の色、吉士の袂を染め、佳人の裳を侵し、芳芬肆に達して、更らに胡蝶を舞はしめたる花の香はなしと雖も、杜鵑血に啼きて新綠滴らんばかりの光景、會場を自然の大觀たる臥龍山に充つ、亦故ある哉。會場に至れば、先づ入口に松田先生、八田醫員儼然としてテーブルを扣へ、委員席の任に當らる。天も亦た此舉に幸せるか、夜來の降雨端なく齊れて金澤に稀なる天氣晴朗。中央の式場は校章を印せる幔幕を以て繞らされ、紅紫の彩旗とりくりに美を競ひ、常磐堅磐の松か枝よりは辭氣立ち昇りて空を棚引き、天部に伶人祝賀の樂を奏づ。來賓席は式場を南に見て、掛茶屋の後に卜せられ、其右方には幔幕うち渡せる。地方有志席あり、學生席は到る處轟々たる竹の柱に、球燈を以て飾られたる作簣屋根

の構造。何れも質朴にして而も雅を離れざる此の裡に我を忘れてすめば、峯の松風そよと吹き寄せ、清幽美妙の中より開會の報は齎らされぬ。

午後三時、一同整列して正賓金子博士を迎ふ。着席せられて一同敬禮、静又肅。

鴨脚君徐ろに進みて開會の辭を述べられ、終つて同志諸君惣代松田壬作氏恭しく祝辭を朗讀せらる

祝辭

本日醫學專門學校學生諸君此卯辰山養生處跡ニ登ツテ醫學博士金子治郎先生ノ學位ヲ賜リタル祝賀會ヲ開カル此美學ヲ贊同シテ市内金澤醫學會等諸君ニ於テモ共ニ會合ヲ爲シ我輩亦々其席末ヲ汚スノ榮ヲ得タリ然ルニ幹事諸君ヨリ不肖我輩ニ同志諸君ノ總代トシテ開會ノ主旨ヲ述ベ併セテ祝詞ヲ呈ス可トナリ之ヲ固辭スルモ不本意ナレバ拙劣ヲ顧ミス各位ノ清聽ヲ汚スヘシ深ク恕セラレンコト伏テ乞フ

金澤醫學專門學校開始以來木村高安ニ先生等類々良善高潔ナル醫學博士ノ學位ヲ得ラル、ノ都度必ズ校内ニ於テ祝賀會アリ今回獨リ金子博士ニ對シテ別ニ醫會等開業醫諸君モ亦々相贊同シテ共ニ祝賀スルハ之ヲ始メニシテ稍々異例トナス然レトモ之レ最モ故アリ他ナシ醫會諸君等多クハ金子博士ト同窓同學ニシテ殊ニ金子博士ハ初學學生時代ヨリ優等級長タラシカ故ニ其情義上ニ於テモ起テ欣然雀躍シ實ニ祝賀セザルチ得ズ如此キ機會ニ太田老翁モ參會セラレ共ニ以テ永ク紀念ヲ表スル所以ナリ尙此他數多記スベキ件々アルモ敢テ贅セズ唯々茲ニ金子博士ニ最モ緣故アル目今學校ノ同一建築物中ノ元ト醫學館ニ於テ初歩ノ解剖學ヲ修メラレ一以貫之ノ精神ヲ以テ今日ニ至ルマテ更ニ其目的ヲ變換セズ内地處々ノ學校ヨリ昨ハ遠ク海外ニ航シテ勉學苦辛ヲ嘗メ終ニ識達セラレテ今回醫

學博士ノ學位ヲ賜リタルハ其名譽ヤ他人決シテ能ハズ實以テ賞揚讃嘆ニ堪ヘザルナリ然ルニ金子博士ハ初學勉勵ノ徂時ニ於テ己ニ既ニ今日ノ地位アル精神ヲ特有セラレタルコトハ我輩當時己ニ熟知セリ即チ明治四年ノ秋ナリシ乎或ハ五年ニテ乎 御前講義ノ事アリ然ルニ本日此祝賀會ヲ偶然此處ニ開カレタルハ實ニ何タル奇絶妙絶ナル因縁ナルカ唯々不可思議ト申ス外ナシ又併セテ一言スベキハ金子博士御前講義アリタル十一日

ハ方今ナル學校ノ紀念日ナルト共ニ同博士終生ノ紀念日ニシテ元醫學博士モ亦々御臨校ノ紀念日ナリ是レ太田老翁ヲ始メ玉座保存ヲ喋々スル所以ナリ此日早朝ニ於テ學校ノ門内ニ此元養生處ニアリタル數株ノ松樹ヲ取寄セ栽サシメタルハ我輩ニシテ今日依然益繁茂シ千歳ノ翠色滴ルカ如ク眞ニ犯スベカラズ然レバ此松樹モ亦々己ニ學校ト共ニ金子博士ノ紀念樹栽ナリ如此ク演スル我輩モ亦々一株ノ松田謹テ祝ス

明治三十八年五月十一日

次に宮崎謙吉氏の祝辭朗讀あり

祝辭

青蘗ノ術由來神秘ノ如ク稱セラレタルモ我國外交開ケテヨリ斯道ノ進歩ハ驟々トシテ其ノ底止スル處ヲ知ラズ濟生救民ノ上ニ於テ實ニ慶賀ニ堪ヘサル所ナリトス是皆ナ斯界后進ノ諸士ガ貢獻セラレタル處我カ親愛ナル治郎君金子氏亦々身ヲ醫道ニ委セラレ多年研鑽刻苦ノ結果今回醫學博士ノ榮號ヲ授興セラレタルヲ聞ク洵ニ祝賀ニ耐ヘサルナリ君力敏才精學固ヨリ其ノ處ナリト雖モ爾來斯道ノ發展ニ隨ヒ社會ノ福利ヲ享クルハ實ニ至大ナルモノアラン茲祝賀會ノ盛典ヲ耳ニシ一言ヲ呈シ謹テ祝ス

明治三十八年五月十一日

宮崎謙吉

續いて我が醫學專門學校學生惣代齋藤傳平氏の祝辭朗讀あり

祝辭

我が金子先生はるれノ月ノ窓ニ螢雪ノ勞ヲ積マン歸朝勿々其ノ研鑽ノ濫
ヲ學ゲテ博士ノ榮冠ヲ戴カル今茲ニ五月廿テ先生カ御前進講ノ榮ヲ擔ハ
レシ佳辰ヲトシ其賀會ヲ開ク嗚呼若葉ノ滴リハざるまんノ森林ヲ偲バシ
マ野鳥ノ囀キハなほちかゝるノ妙聲ヲ想ハシム名山ハ芬芳ヲ藏シ大澤ハ龍
蛇ヲ孕ムト先生我カ校ヨリ起キテ醫學解剖界ニ光輝赫々名聲ヲ擅ニセラ
ルマタ我カ校ノ榮譽ニアラズヤ謹ミテ祝辭ヲ奉ル

明治三十八年五月十一日

金澤醫學專門學校學生惣代

齋藤傳平謹白

祝賀會委員沖野彌一郎氏進み出で、金子博士の正面に立
ち紀念品目錄を贈呈す。是に於て金子博士は鄭重なる態
度を以て、湧ぐが如き拍手喝采の裡に挨拶の辭を述べら
る、其の要を摘録せん

私は曩に金澤醫學所を卒業しましてから教鞭を執て居
りますこと茲に二十有六年間て然かも淺學非才何の爲
すところなく最早や棺蓋を覆ふの今日甫めて一个の學
位を受けましたるは洵に慚愧の至りで御座ります然る
に諸君は不肖の爲め本日を下し此の卯辰山に斯る盛大
なる祝賀會を關かれ御招待の榮を得ましたるは誠に汗
顔の措く所を知りません然し是れも學生諸君の熱誠と
學友諸君の厚き友情に出でたる譯なれば漫りに固辭す
るも本意にはありますまいと存じまして鐵面皮しくも

甘受致しました次第です

抑も不肖何等の爲すなく徒らに晩年に至りましたのも
素より不敏非才の致すところで御座りますれば致し方
もない次第ですが唯茲に私が信じて居りますことは教
育に貢献すること、學界に忠實なる事とは常に兩立し
能はざる事であります則ち可及的普通の設備により可
及理解の勞を除く事に努むることを教育に貢献すると
云ひ一部の學題を捕へて之れが天秘の開蓬に努むるを
學界に忠なると申しますが此の兩者は素より絶對的に
離反するものではありませんが凡の穎才でありますれ
ば始めて兩者を全うすることが出来又學者の本分であ
るとは申しながら之は兎ても凡庸の企て及ぶ所ではあ
りません若し不肖の如き凡中の凡非才中の非才のもの
が力を一方に傾注しますれば勢他方に疎ならざるを得
ません況や望んで居ります設備の未だ充分でない時に
如何して出来ませう是れ不肖の非才と雖も職責を重じ
て犯りに功名に銜はず孜孜全力を教育に致し自ら慰藉
したる譯であります而して今や秋毫の微と申しても聊
か學界に研究を試むる事を得ましたのは全く滿二年間
直接勤務に遠かるを得ました結果でありまして高安
校長の推薦を辱ふし留學の恩命を拜して一方にては同
僚諸君の厚き盡力と新舊學友諸君の種々の方面に與へ

られたる加護に因る所であります故に今茲に再び諸君に感謝を表するは又不肖の責任とする所であります由來此の卯辰山は我が醫學專門學校の歴史上最も深遠なる縁故あり戊辰の役當山に養生所なるものを設け藩士の創痍を収めて療治したるを以て抑もの事の嚆矢とし延て明治の初年藩之れを城北大手町(則ち今の本校)に移し一般診療療病の外醫生敎養の事を開き始めて醫學館の名を附けましたが間もなく世は皇政統一に復歸し諸藩の事業は一度び茲に瓦解し此の醫學館の如きも此の悲運に遭遇し當に廢れんとするの折柄三人の元老がありまして此際許多の私財を投ち經營百方苦心慘憺此の難關を凌ぎ本校の基礎を今日の如きに挽回したるものであります太田美濃里翁は則ち元老の一人で松田壬作翁は當時敎長として良く三元老を補佐し敎育と診療とに従事され藤本純吉、不破鎖吉の両翁亦親しく敎鞭を執られました今や他の元老は逝いて此の世に居まざるも獨り太田翁ハ尙鑿鑿として醫界に貢獻せられ今現に松田翁と此席に在ます我醫學專門學校の今日あるハ素より現校長に多とする所でありますが此等先輩が創業に際し困難を排し我校の歴史上第一期に致されたる功勞は本校の美石と共に永く没すべからざるものあるを信じます今計らずも學生諸君に元老及び先輩を

紹介するを得ましたのは不肖の光榮であります又不肖が本日此の縁故深き卯辰山で斯かる温き家族的團欒中に此の光輝ある祝賀會を辱ふし殊に只今之結構なる好紀念物を賜りまして身に余す御過賞實に無量の感慨よ追り謝辭の出し様もありません願くば何卒御推量を願ひます聊か御挨拶までに謹んで申述べました次第であります

實に先生の態度は謹嚴なりき、先生の語は莊重なりき、先生が滿腔の熱誠人を動かさずんば止まざりき。拍手喝采の下に博士は悠々として復席せられ、此に式を終へたれば委員告げて曰はく、輕快なる余興に耳目を慰ましめよと。一同爲めに動きて拍手の聲再び天に冲せり、彼處より。

○餘興

忽ち聞く場裡一聲の笛にはあらで、爆然たる爆竹の音！委員すでに準備を整へ、余興係は大聲一呼して綱引競技を報じぬ、輕裝したる勇士は四年一年、三年二年の二組に別れて技を競ふ、抽籤によりて陣地を定むるや、勇士皆齊しく意氣揚々、其の號令の到るを待つ、松田先生が「用意！」の聲と共に体は等しく前方に傾く刹那「始め！」の令の下にエイシヨウの聲高く、猛虎の威、蒼龍の勢、暫しが程は何れも意氣捲き勇んで勝敗の決すべきにあら

ず、一瞬又一瞬、滿場の觀者をして覺せず手に汗を握らしめ、賊聲とじろき、拍手万雷の轟くに似たり、嗚呼何ぞ夫れ壯なるや。

次に旗取競走あり、健兒十七名、一時に峻坂を飛び下り、荆棘を排し、地を蹴り、風に乗じて走る、其の行路の難澁なるに拘はらず、何れも不覺どころ口惜しけれ、ここを先途と疾驅するさま、昔よく走りけん押松もかくやと思はれたり、聲援一時に靜穩を乱して叫喚！呼號！！競爭終つて一同轉た空腹を覺ゆる頃、饜應掛が必死に尽せる甲斐ありて、當日の尤物たるメツタ汁は味加減よく出來上りぬ。試みに思へ。各自が腰間に携へたる梶の重量が如何に登山に困難を來したるを、然り而して今に及んでは却つて梶の小あるに悔いたるもの果して幾人？すらりと居並びたる面々、何れも逞ましげの男の子のみ。中には五尺に足らぬ身の丈に、蒲柳の質、風に得たをぬげなる面々まで、今こそはくとして肩を聳びやかせる。一時に賊聲をあげつゝ大鍋の周圍に襲ひ來る、東より北より、南より西より。其の雜沓たる飢餓の群狼が病羊を襲ふもかくやと思はれ、半尺の筆よく名狀すべからず。一ダースを傾けて意氣揚々たる者、僅かに一梶にして飽き、肉、竹の子など好き食ひする者、到底尽すべきにあらず、樹陰に參觀せる老翁、耳語して曰はく『あれでも

お醫者様なるか』と、呵々。

斯の如き風情、元より珍とすべき饜應なしと雖も、現代の紳士たる會員諸氏が之れに甘んじ、熱誠以て此の行を壯にせられたるは、近來稀に見るところ、現今朝野の貴顯が待合樓上、囊庭を叩いて絃歌に耽る會合とは同日の談にあらずと信ず、蓋し金子先生に於ても亦た大に満足せられたるならん。

快又快、この和氣靄々たる興の可笑しさに時の移るを忘れて佇めば、夕陽己に西山に傾き、晚鴉啼を求むるに忙はしく、四顧漸く蒼然たり。此に於て委員出でよ閉會の辭を述べ

両陛下萬歲、金澤醫學專門學校萬歲、金子博士萬歲を唱へ、衆之れに和す、時に午後六時。

斯くて樂しき會は終はりを告げぬ、我等が今宵の夢や如何ならん、未來の博士かドクトルか、杜鵑血に啼く青葉陰、妹が唱歌のひと節も、弟が兩頬に漂へる笑の涙も、夜な／＼夢に親めど、せめて一夜は親しき友との團欒に再び歡を盡さしめよ (野村雨城記す)

○十全會柔道部寒稽古及大會

旅順己に陥落し奉天將に我が有に歸せんとす國內同胞の士は意氣衝天の勢を以て大に精神修養心身鍊磨す可き秋

なり茲に於てか我か柔道部は北風凜烈として峭寒骨髓に徹し六花紛々として面を打つの大寒に際し三旬の寒稽古舉行に決定し一月十三日午後六時より寒稽古を開始せり出席者四十有余名白糸絨に身を固め疊ヶ原に會戦して心身の鍊磨技術の研究に孜孜として此れ勵む膺露出征將士の困苦に比す可きに非らざるも徒に暖爐の側に潜居して空想に沈める軟弱男子に比して其優美なる氣象勇まじき行爲は實に十全會員の模範とす可き所否實に戰勝國青年が武士道を實踐すべき動機なりとす左に皆勤者諸氏を介せん

- 稻崎重助 乾 一夫 林 秀雄 額 又太郎
- 加藤健之介 加藤 錠吉 河野 通夫 吉川 友信
- 田中新太郎 瀧澤 武藏 津田 弘 辻井禮太郎
- 上木隆基 太田 勘市 大野 留次 桑原益方
- 不破才三郎 淵原隆庵 酒井 碩二 佐竹清吉
- 榊原光之介 城谷 隣賢

柔道大會當日の景況

杜選の徒甚しきに至ては醫を以て以て婦女子の弱軟に比するあり豈愚の至りならずや仁術を以て國に尽さんとすする試忠無二の我が柔道部員滿身の熱血は三旬の寒修行にて不撓不屈の精神に變じ兼て鍊磨せし石身鉄脚を試んと腕を扼して施武の日を鷓首せり時は來れり二月十九日

柔道大會舉行の揭示を見るや勇氣日頃に百倍せり去れば當日は號砲相圖に整々として群集せる勇士の面々は本校生徒は勿論四高第一中第二中の勇將連鬼をも挫かんとする勢にて肥肉稜々として參集しさしも廣大なる濟々堂も殆ど立錐の余地なし來賓は雜沓し委員接待に忙殺せらる定刻に至り青木先生審判の下に嚴肅なる勝負は開始さる

抱分 横掛 須賀 芳篤

大野 留次

須賀氏斯道に志し日尙淺きも大野氏に比し力量勝れし爲めか横掛抱分を以て勝を制す

加藤 錠吉

大外薊 体落 榊原光之介

共に少壯英意の士互に桃み戦ひしか其業や勝りけん大外薊体落を以て勝は榊原氏の手に歸しぬ

脊負落 小外薊 西 宇忠太

矢原 準一

西氏は精銳の士矢原氏に比し小柄の業物脱兎の勢を以て小外薊脊負落に矢原氏を破る

田中 三彌

大外薊返 大外薊返 土屋

共に男子中の大柄武士田中氏は本校切ての太刀打名人なり勢鋭く大外薊を仕掛たりしに却て土屋氏の乗る所とな

り二本返業に破れしは是非もなし

体落 酒井 碩治

河野 通夫

共に寒稽古皆勤の豪傑酒井氏斯道に志し日淺しと雖も已に柔道の妙理を解せり進て河野氏を体落に破る河野氏屈せず奮闘數分にして更に決せず一本勝負の聲の下に酒井氏揚々として控へたり

大外蒔込 釣込足 不破才三郎

田中新太郎

共に皆勤の若武者田中氏機先を征して釣込足を以て敗る不破氏之是れ豪傑進て大外蒔を試むるや能く掛りしとは云へ田中氏の爲めに返されしは是非もなし

平松 敏郎
加藤 健之介

加藤氏寒稽古を終へ其猛勢當る可からず平松氏加藤氏に比し身短なりと雖も何劣らぬ肥滿の武士奮闘數刻にして決せず引分の聲下に退陣せり末恐ろしき猛士かな

籠 惠

小外蒔 横掛 乾 一 夫

乾氏皆勤の勢を以て小外蒔に進む籠氏劣らず大外蒔を以て奮闘せしも横掛にて破られたり

額 又太郎

足拂 足拂 辻井禮太郎

共に皆勤者少壯英意の士辻井氏の足拂は已に特意とする所額氏弱きに非らざるもバテントに掛けられたり

小外蒔 太田 勘市

大内蒔 稻崎 重助

共に皆勤者太田氏に外蒔を以て先機を征し勢鋭く攻撃せり稻崎氏恐れず防拂數分大内蒔を以て敗り互に勝負決せず後日を約して陣頭を退きぬ

釣込腰 大外蒔 城谷 隣賢

桑原 益方

共に皆勤の猛城谷氏頃日の上達は衆目の集る所なり桑原氏も又將來大に有望の士互に甲乙無二の骨格なり城谷氏の仕掛けし大外蒔は桑原氏の弱点なり爲めに次きての釣込腰に桑原氏又起す惜むべき事共なり

林 秀雄

小内蒔 鈴木 琢磨

鈴木氏寒稽古九分出席者皆勤者の中を脱す記者の遺憾とする所林氏に比せば業は劣るも已に怪力を以て名あり奮闘數分小内蒔を以て敗る林氏屈せず戦ひしも一本勝負にて終りしは林氏の爲めに惜むべき事共なり

平澤 謙齊

淵原 隆庵

淵氏斯道に熱心なること本校柔道部の隨一ならん時々刻々の進歩を以て先に第二中に意外の功を奏せし剛の者平氏又是れ無級者中屈指の手者夙に蠻勇を以て名あり奮闘數刻にして決せず引分となる

次て三十分休憩なり石川部長より皆勤者に証書を授與せらる名譽あるメダルは皆勤諸士が胸間に輝けり夫れより進級証書を授與せられ左の三氏は昇級の榮譽を戴かる

三級に昇級せしもの

吉川友信

四級に昇級せしもの

津田弘

瀧澤武藏

次て拍手の裏に立て莊嚴にして犯す可らざる形を演せらる是を視ては懦夫も又勇に怯夫も又剛になるならん

講道館勝負法ノ形

吉田宗一
吉川友信

鉄脚を以て名ある吉田氏受身となり吉川氏捕の任務を司る其投業の壯剛なる其當業の勇壯なる其當業の精妙なる神出鬼没の勝負法は恰も是れ實地の勝負を見る如し柔道觀念乏しき輩さい柔道の妙理を解せる様を表へせしころ芽出たけれ

講道館投之形

高井魯一
吉川友信

此形は本校の御大將小野環將軍が高井氏と共に演武すべ

き所環將軍病氣の爲め出馬なく不得止吉氏之に代る高井氏受にて吉氏捕なり此れ講道館投業の奧妙を寫出せし優美のもの殆と往古柔術の比に非ず進退縱横自在の振舞美事なりき心身の鍊磨精神の修養武士道の發展は即ち是れ此處に有らんか圓滑精妙茲に努々するを要せず

横掛 二中 大谷利忠
近藤琢磨

大谷氏は近氏に比して軀幹小なりとこそ先鋒の重任を負ひ來り戦ふもの近氏横掛を以て一本を征するや大氏喉絞に來り近氏敗れんとすると數回危機一髪の間を逃れて能く防ぎ戦ひしはめでたかりける次第なり

本袈裟 二中 白嶺慶敏

布村祥

白嶺氏二中校の中陣となりて來り爰に戦ふもの布氏久く欠席せしも之れ又本校の勇士小軀と雖も業の輕妙なる事遠く白氏の右に出つ若し堂々投業を以て戦はんか布氏空しく本袈裟の固を蒙むるの非運に接せざりしならん先に無聲堂にて此禍あり今又氏特長の腰業を施すの機を得ざりしは返すくも遺憾とする所なり

小外菊 四高 小川重雄

羽田幸太郎

小氏四高先鋒の重任を以て來り争ふの士羽氏久く欠席せ

しも進て之が防拂の任に當る其勇や敬すべし奮闘數分に決せず引分の聲の將に出んとする瞬間に外蒞にて坐りしは深く羽氏の爲めに遺憾とする所なり

× 大外車 四高 吉澤謙太郎
小外蒞 津田 弘

共に是れ肥肉稜々たる若武者吉氏四高柔道部最優の熱心家頃日の上達は殆と老輩をして舌を卷かしむること屢なり去れば其大外車は一度出れば敵を倒ざるとなし津氏は本校新進の驍將未だ嘗て敵に後を向けしとなき剛の者當日組合の第一とも云ふ可きか初め津氏特意の小外蒞は謙氏をして轉せしも謙氏剛勇金剛力を出して大外車を以て津氏を伏さしむ傳聞く花和尚魯智深が史進と戦ひしも斯やと思ふ乍りなり悪戰數刻にして決せず後日を約して退陣せり勇ましかりし事共なり

× 四高 西 成 伍
二中 宮 川 壽

宮氏圓轉滑脱の奇士我々小出氏病氣の爲め欠席不得止四高中に左る者ありと知れたる西氏と相戦ふ宮氏体落を以て攻めは西氏圓轉自在能く逃れ觀者をして手に握汗せしむると數回勝負決せず終に引分けとなる

釣込腰 釣込腰 四高 山崎亮五郎
大杉近造

山氏小軀なりとも場慣の猛士大氏銳氣不當無双の好敵手なり大氏左釣込を以て二本の勝を占めしは山氏の爲めに遺憾とする所若し山氏の大外蒞を以て攻守を轉せしめは勝敗未だ知る可からず之を出し惜みしは之れ大に遺憾と爲す所なり

脊負投 四高 倉内 松藏
一中 八里喜久男

倉氏四高の名將遠く八氏の敵に有す去あれ八氏近來の上達能く剛敵と組て後れず數分の后脊負投に敗れしは是非もなきと共なり

縱四方 捨身腰 一中 齊藤良三郎
高井魯一

共に是れ無双の好敵手齊氏一中の重荷を負ひて來り戦ふ者高氏之是れ我校の驍將過日投形稽古中風邪に冒され頓に平日の勇氣を減せしも屈せず剛敵に向ふ其勇や眞に古武士の風ありと云ふ可きか是等晴の勝負ならんと色めき渡る豈屠龍縛虎の壯觀なき理あらんや互に鏢を削て戦ふと數刻にして決せず疊ヶ原の鬼門に至るや高氏攻勢を取らんか爲めに地位を變遷せんとする瞬間に機を見たりけん齊氏の捨身腰極て高氏右足に打撲傷を受け起す柳葉風に翻るの妙技を施に由なく無念の涙を飲みて齊氏が縱四方に勝を譲りて陣頭を退きしは遺憾なりける次第なり

番外五人掛



顯れ出しを誰れとなす姓は吉田名は宗一氏旭の勢を以て上達せるは夙に世の高聲する所五人の猛將を相手として戦はんとする勇氣轉た鬼神も三舍を避る所ならん本氏脱兎の勢を以て猛進し戦ふと數十秒縱四方に敗れ宮氏次て腰車に敗るゝや八氏戰友の仇逃さじと悲憤の相凄しく戦ふ吉氏右足に傷あり傷むと甚たしかりしも何條之に屈すべし鬱敦たる蠻勇否銳氣は八氏をして右釣腰に轉せしめ津田氏を防く是れ互に校中の驍將中原の鹿將亦何れに歸せんとするか津氏關西仕込の足拂左脊負を以て來れば吉氏釣込腰を以て之に答ふ掛は裏に移り裏より裏に入りて愈々奇なり吉氏之れ鬼神に非ず疲勞すると切なるも一世の金剛力を奮て大外車に津氏を破る齊氏我れころ味方が會稽の耻を雪がんと整々として戦ふ霸氣肩宇に漏れ勢當る可からず吉氏傷足を踏みシメ、攻撃するや却て齊氏の乗る所となり裏投の劊を蒙りて又起す再び齊藤氏をして月桂冠を載かしむ遺憾此事を云ふ可さか去あれ吉氏尙

春秋に富む此日の勢を以て會稽の耻を雪かんことを祈るや切なり

終に臨て高安會長石川部長青木先生各委員諸氏が當日の勞を謝す

出演諸士尙益々奮勵事に當て不撓の精神を發展あらん事を並に我が柔道部の追日隆盛ならん事を祈る(照陽記す)

○木杯下賜 去日我が校生徒一同、報國の旨意を以て軍資献金の擧あり、第四年級は金拾參圓餘、第三年級は金貳拾參圓餘、第二年級は金貳拾參圓餘、第一年級は金貳拾圓餘にして、今回該當局者より各級に宛て賞狀に木杯一個を添へて下賜せらる、今左に本文を掲げ以て紀念となす。

金澤醫學專門學校内

林 篤

外六十七名

明治三十七八年戰役ノ際報國ノ旨意ヲ以テ軍資ノ内へ金拾參圓餘献納候段奇特ニ候條其賞トシテ木杯壹個下賜候事

明治三十八年三月二十日

石川縣知事正四位勳三等村上義雄 囑

右全文

金澤醫學專門學校内

吉池省吾

外八十六名



故萩野隆光君

右全文

金澤醫學專門學校内

小黑仁太郎

外百三名

題辭

明治三十八年一月十一日牛莊の役、わが萩野隆光君戰死す。夙に東京中學を終り明治三十三年本校に入る、性温厚篤實、能く遊び能く勉め時に頗る勇壯の舉ありき、而して明治三十七年六月二十日業半にして第三師團後備歩兵第三十三聯隊に招集せられ出征して遂に凱旋を見るを得ざりき嗚呼悲哉。空窓相謀り茲に其肖像を掲げて永く紀念とす。君の生國河藝郡玉垣村大字玉垣、明治七年生。

金澤醫學專門學校内

杉部多米吉

外百十八名

右全文

○第二回軍資献金 曩に報國の念進りて學資の一分を割き、軍資に献金したる我校生徒一同は、今や舉りて再び献金せんと欲し、醫學科第二等級以上及び藥學科第三等級は各金五拾錢、醫學科第一等級及び藥學科一二年級

は各金三十錢を蒐集して既に金貳百〇七圓六拾錢は上る左記の諸子は此の擧に賛して未納たりと聞く、忠君愛國の士たる者宜しく三省して急納せられむことを

- 吉田 豊馬 湯淺 啓一 木村 和義 金子 精一
- 八木 徳太郎 曾根 章 毛利 徳 金岡 精彦
- 稻田 謙 小村 吉五郎 山脇 熊入 溝口 龍三
- 藤坂 友次郎 奥野 源次 川勝 良造 川勝 寛三
- 平塚 甚之助 村田 金廣 酒井 利勝 高野 友衛
- 吉野 新八 辻 實治 大河内 忠三 玉井 七次郎
- 松江 英五郎 河野 益躬 新名 蘆 久田 徳
- 貴島 善兵衛

○御断り 本誌漫録欄の材料として寄せられたる金篇玉章積んで山をなせり、然るに本部財政の窮乏は紙數の制限を余儀なくせられ、爲めに之れを掲載する能はず、遺憾ながら次號に掲ぐる事とせり、諸君乞ふ之れを諒とせよ(係)

- 無題集 丁々 閑人
- 春題雜吟 赤竹 松生
- 共同生活寫生帖 小林 綠水
- 試験勉強病 野村 雨城
- 白山紀行 米 溪生

○編輯 日記

◎六月三日 (土曜) 雨 昨日からの残り、胎生の勉強にかゝる、つくづく

雨城 生

其の覺え難きを感嘆す。午後の繻帶實習を了へて歸れば、長町高等小學校生徒の一隊、足駄の蹠足を以て寓舎の前を過ぐ、いと暮し。十全會雜誌第三十八號の編輯會と聞き、急ぎて例の會議室に到れば、部長を始め他の委員諸氏も在らず、さては一本ぬかれたるかど悔めども更にかいなし。宮田先生(部長)が試験前の事として御氣遣下され、先生に於て専ら任に當らせらるゝと聞く。歸路、紫峰子を河原町に訪ひ、雨橋子の動靜を噂す。夕暮に近く、手紙の來るもの二、一は家郷より、一は三等軍醫伊藤學兄より。夜に入りて病理各論を調ぶ、視捷會や、提灯行列にて市中騒々しく、四面楚歌の聲高し。癪に觸れて眠られず、フト歸省のことを思ひつき、ふる日記を引き出して見る、去年の今日は

晴。机上の燕子花只一つ咲く、繪葉書の流行に伴ひ、繪葉書蒐集に憂身を憂す者多く、百洋子の如き其の一人なり。放課後、同宿の松原兄と共に萬蒲湯に出懸く、正しく十二日振り。近日歩兵第三十五聯隊の出征と聞き、提灯行列の催しあり。午后三時、本校へ打合せの爲めに出張す、止むなく作歐の大任を春貫ひ、途中考へつゝ歸る。夕餐直ちに筆を染め、十二時に切り上ぐ、其の歌自分ながらに拙劣なりと思ふ、但し試験前一刻千金など野暮な心を起し、推敲するの勇更になし。

- 十年の昔血を染めて 我が手に得たる遼東の國威を揚ぐる時は來ぬ。
- 遺根をばらし仇を討ち 旅順ハルビン討ち破り 屠れやセントペートル府。
- 行け北陸の快男子 旭の旗たて、義に勇む 我も丈夫のゆくと、國の御威稜を視はずや。
- ウラルの峯も乗り越へて 虎狼も吠えず敵もなき 燃ゆるばかりの心もて 共にさゝぐる灯の 凱歌あぐる日を待たん。

感激の念中に礮轟し、遂に發して唱歌となり、五百の口を衝て迸る。當時、旅順の陥落を望むや切、半年を出でずして快報に接し、恰も一年にして今また海戦大捷の吉報に接す、轉た今昔の感に堪へざるなり。十二時過ぎ床に入り、試験前なるを以て今日限り、うた日記を懸せんとす、偶々病理のレフか思ひ浮び、最後のへなうたとして併せて二首をよむ。

癩病は人のいやがる天刑病和名かつたい原語レブラや西洋ジブアあれで美人かい瓢箪に手足のやうな見つともない奴

* * * * *

通信

○佐々木教授伯林第二報

(明治三十八年一月廿一日發十全會宛)

己に在伯三月に及んだ已往を考へて見れば矢張「ぼんやり」したものだ掛けすり廻た御影けて大學教授法の大体を會得した積りと冷かし勞れとて追々仕事を「コンチェン トリレン」した一般の事情も大部分つて先づ不自由はない此三ヶ月内に最も嬉しかつた日は一月の二日と十六日だ此十六日は日本の知人から始めて手紙の着た日て封書か七通と繪はがさが十葉だ然のみならず爲替が着た先づ知人及家族の無事なることを知り金澤専門校の事情も分

つた午后は休て終日繰返へして手紙を讀た一月二日は旅順陥落の號外を見た日た僕の出發した九月上旬に旅順か落ちる積て京濱ては種々の計畫をして待て居た位だつたか十月中旬當地に着した后ても沙汰かないのみならず攻撃度毎に多數の死傷ありしを聞くのみた殊に第〇師團の死傷か非常に多いと云ふ噂た之れに反して「バルチック」艦隊は愈出發したと云ふ何れ日本でも相當の準備はあろーが中々油断は出來ない、すると十一月三日の天長節に占領すべき計畫をして居ると云ふ噂た此日公使館の夜會て公使は勿論來會者は頸を長くして待て居たがどう沙汰なしで終た、すると忘れもしない一月二日の午後一時た同宿の紳學士か旅順降服の號外を以て飛込んて來た早速一同食堂に出て下宿の家族と共に祝盃を擧げ早速公使館に祝詞を述へに行た其後五日日本俱樂部新年宴會があつたか外交上の關係と見へて只新年と共に一同萬歳を唱へたのみであつたどーも夫れ斗りては氣か濟まぬと見へて一月十日に「シャロットン」町在留の日本人か「コッホ」と云ふ料理店て本式の祝賀會を開いた此町は金澤の松任と云ふ様な處たけれども僕等も早速之れに加はり無量四十名斗集つた恰も旅順陥落と染た軍國旗半ケチを一ダヌ送た人か有たので之れを場の中央に恭しく釣り下げた是れは其實十一月下旬に日本を發し偶然一月二

日に着たのだ先つ發起人の演舌かあり紀念の爲め出席者自筆の連名で軍隊に祝辭を遂るとになつた次で萬歳を唱へ食事を終て旅順陥落の唱歌を作て唱ひ小島少佐の兵士教育談あり十一時過に散會した奇しき盛會であつた伯林の東洋觀は未だ新聞をすら〜と讀む譯に行かぬから大口は聞けぬが戰況の電報は毎日許多新聞上に記載してある、だから戰地の主なる出來とは翌日位に分る(主としてロントン、ペートルスブルグ及東京)旅順陥落の號外高安君にも二三葉送て置た筈だ此の戰爭で日本と云ふ國を知らぬ者はないとになつた然のみならず萬歳と云ふ日本語を知て居るものもある旅順陥落の時の如きは途上日本人を見れば萬歳と云ふて祝する者かあつた殊に教室の助手副手の如きは得意で萬歳の語を用ゆるものか多い獨乙個人殊に猶太人は露國を喜はず反て日本の戰勝を希望する様なれとも政府は外交上露國に助勢して居る様だ僕か到着した十月頃は三十名の探偵を日本人に附たろ一な甚しきは公使館附の海軍武官か恰も「ハルチック」艦隊出發準備の際北海の「ハンブルク」港に旅行した爲め嫌疑を受け警察に拘引せられたろ一な蓋し獨國は露佛の狭撃に遇へは片なしだから露國の機嫌を取り戰爭を増長せしめ以て日露兩國を被弊せしめ其間を甘い汁を吸ひ旁自國を安泰に置くと云ふ策ではないか

北海事件も馬鹿げて居るてはないか疑心暗鬼も程かあるね一けれど日本艦隊が「マダカス」に現われたと云ふ電報を一二度見たから或は北海の水雷艇も日本のものかも知れん蓋し信じ難いね一こんなとも獨乙の密通らしい英國もなんだか龍頭蛇尾で不得要領に終た様だ夫れとも何か外交上のこんながあるのか知らん此の結果で露は英のカプトの下を見抜き第三艦隊を出發せしむる勇氣が出たのだろ一同盟などは中々當てにならないね一英國に於ける日本公債の高利を見て分るよ一だね一近頃伯林の新聞に日本人の人情風俗殊に性質か往々記載される誤解もあるか余り良くは書かない殊に商人の信用かない様だ何れにしても新聞上で毎日日本を世界に紹介して呉れるのは戰爭の御影だ日本と云ふ國を全く知らんか或は支那の屬國と思て居た者か多かつたのだからひどいよ今回の戰爭に附ても日本の舉動を無理とは思はぬ様なれとも小日本か到底敵てない大露國と戰ふのは無謀だと思て居ると見へて最後の見込か附て居るか何なんぞ問ふものがある僕は之れに答へて曰くさ僕は政治家でないから細いとは知らぬけれども見込のない戰爭はしない筈だ又日本は敢て戰爭を希望しないが今日の場合やる處までやらねばならぬと云ふのが日本人の得色だ只生命と財産をろ一費するのは困つた事だと云た又問て曰くさ露は

五十万の兵を滿洲に送ると云ふか之れに對する兵數を送るとが出来るかと云ふから夫れは出来ないことはないこと云つたら何地より持て來ると云ふ問ひに驚くではないか無論自國人たと云たら不思議な顔をして居るものかあつた是乃日本を最小國と信して居る証據だ又曰く東京は伯林の何分一たと云ふから無論伯林より大なるのみならず世界第一たと云てやつた又東京の人口を聞くから三百万たと云たら驚て居た其實二百万以内たろ一な伯林在籍の人口は百八十万だそ一なこーゆー風だから早く日本を世界に紹介するには多數の西洋人を日本に入込ますと必要だ戰勝の後は世界大博覽會でも開て廣く日本を見せる方かよかる一けれども一寸來た位では中々事情が分らぬから多數の日本人も亦西洋に入込むと必要だ戰爭も長引ては困たものだ井上流の消極主義にやられてたまらないね一留學費は全滅と云ふ新聞を見たが眞實なら正義の沙汰でないね戰後の經營に對する余猶かないのか知らん早く奉天を取て「ハルビン」も追拂つたら戰爭の名分が立つから止めてもらいたいね一浦鹽を取れば結構だけれども外國の燒餅か許すまい近頃熾和の噂か時々出るのと露國內地には革命が起りろーだから長い事はあるまいとろーく露帝が爆發を食たとか愈今日の新聞に現はれて來た怪我はなかつた様だけれども大に敵の勢力を殺

いだから愉快だ

余り政談に亘つて中止でもされては困るから通俗の方に轉しようさて獨乙のとは以前から色々友人に聞て居たから左程驚かないか第一着に驚いたのは吾下宿の下の門の戸の重さと三階八十八段の上下だ戸は二間四方位な鉄製で自力で閉鎖する觀音開きだ此の重い戸を出入毎に鍵を以て開閉す最初二三日は鍵か中々廻わせなかつた段は東京の愛宕山か金澤の向山天神坂を上下する價値は確かにある何人も自宅の入口迄登り切ればハット一息付かぬものはない物は慣れて此頃は兩方共余程樂になつた其外食事か遅くて多くの仕事は朝飯前に終ると(第一回の食事は午后三時)食事時の長さと食事中無暗に談話すると日の短さと暖室的教室の少からざると等は己より前便に書たと思ふから略して其他豫想と違た事を書いて見ると西洋人は金錢上のは正しいと聞て居たか中々するい處がある先づ毎月の計算と間違いのないとは之れを訂正せしむるには當方に証明材料かなければ承知しない其代り手扣へても見せれば平氣で訂正するだから毎日の飯の度數ピールの瓶數等を記載して置かねばならぬ日本の考にだと飯を二三日位欠席しても僅かな様だけれどもこちらでは直ぐに四五圓になる殊に何れも足らぬ勝だからね一けれどもこんなとを一々記載するとはとても吾々には出來な

い、從來の日本人か多少のとは大目に見て居た結果段々大きくごまかす様になつたのかも知れない此頃の日本人は書生上の若手か多いから中々「オーヨー」でない又洗濯物も下宿でやつて呉れるのは便利だが是れも覺書かないとなくなる己に僕はエリ、カプス、番下、半ケチ等をなぐした獨乙て買ひば中々高いからね、恰も泥坊の家に同居して居る様で中々油断は出来ない、又買物の釣錢をごまかすとか時々ある是等は日本人は凡てれーようだと思て居るのか計算に暗いと思て居るのか或は先方の無頓着なのかも分らん但し在留日本人は凡て富有だと思て居て日本人の下宿を喜ぶものが多いろーな、其外教室で實習用具を置き忘れると最早手に入らない學校から借りて居るものでも全一だけれども官品を持ち歸るとか或は樂書の如きは見たくもない奇麗なものだ公德は日本人の及はぬ處だ

湯は外湯であるのみならず風呂場て直ちに洋服の正装と來ては困たものだと思て居たか案内外湯のある下宿かいくらもある日本服で自由に入れる、所か僕の下宿の湯場は便所と同居だ又困るとは上り湯がなく一人前の浴槽の内て全身頭から尻まで一所に洗ひ槽外に水を洩す場所がない、槽と釜かトタン張の流し一杯に置てあるから其一隅て便所の手洗鉢に湯を取り先つ頭を洗つて之れを此

流しの様なトタン張の所に開けたすると此流しには水はけがないので水か流れて外に洩れ出て便所の洪水となり下家に洩れたとて大變だと云て大に叩られた實に彌次喜太の様だ其後は汚水を便器の内に入れると工夫した日本服は余り必要かない様に云つた人かあつたから荷物も大きくなるので僕は寝衣に浴衣と「フラチル」を各二枚宛持て來たのみだか他の人はドテラ、マントウ杯迄も持て來て居り中々便利だと云ふのは洋服に慣れない者か終日固い道路(セメント様若くは石)を掛けすり廻り彼の十八段の上下をするので肩や下肢か張り(年のせいかも知らぬとも)歸宅早々日本服に改むれば打ち寛ろいて仕事の出來るとは日本に居る諸君にも分る金澤病院の患者てはないけれども相成可くは疊かほしい位だ元來日本服で食堂に出るとは宜布ないのだけれとも日本人の下宿は大抵承知して居るから宅に居る内は平氣で皆日本服を着て居る又悪友か誘ひに來ても着代へるのか面倒だと云ふて外出を斷る豫防にもなる又「マントウ」は外出時に濫い斗りてなく日本服の儘一寸門外、郵便を出しに行くとき杯便利だ夫て僕は態々日本服を取寄せるとにした位だ處か税關だがへたをやるとうんと取られるろーだ夫れには衣類なればタモトクンを入れて古物にすればよいろーたろーでなければ何ても新しき物と見て綿迄も絹物同様の

税を取るそゝな外の絹類でも配達夫の手を經すして直接に自ら出張し商人でない云ふとか分れば少くして濟むる一な夫れには「プロフェツトル」の片書か役に立つのだ序に贈物の名案を一ツ献上しよう凡て西洋人は手細工物を悦ぶのて最も便利なのは五乃至拾圓位の花鳥類の縫物若くは畫(絹地)を持參して當地でワクを造て額にして送れば二三十圓から四五十圓位のものなる今一つ序に旅中一番恐れて居る税關だか僕は絹物も多少持て居たけれど無税で通た普通の如く荷物と共に旅行すれば伊太利、シユワイツ及獨乙の三關門を通過する毎に隨分厄介なるのみならず伊太利では毫も獨語が通せぬからまごつくど「オイテキボリ」を食はねばならぬだから紅海中で日用品の外は船の荷物掛に托し直接伯林なり何處なり自分の落付く處へ送らするのだ、そゝすれば一回て濟む是れは木村君に教わつた法だか何れもそゝして居る様だ今一つの秘密は荷物受取の通知か來たら其時間のマギワに取りに行くのだろゝすると役人か早く歸りたいものだからこゝにして渡してしまふ僕は偶然に此の法をやつてどうく荷物は一にも開きつこなしさ方一面働などか起たら日本人の必要家具だと云ふか或は三四「マルク」握らすれば譯けなく濟むるゝな要するに税關は産むより安いよ税關よ就て一つの骨稽がある「グヌア」上陸の際第一の關門を

通つた伊太利は烟草の極めてやかましい國で瀛車でも「ボツケット」迄調べると云ふ噂があつた位だ(まさかろんなどもなかつたが)先つ税關に誘われ手荷物を開て待て居ると税關吏か大きな聲で「シガー」「タバック」くくくどどなつて來る「ナイン」くくく云て居るとまだ「シガー」「タバック」くくくをどなり續けて居る遂に荷物をかき廻し始めた蓋し此人は自ら「シガー」をばかくふかしなから「ナイン」くくくをやつて居つたからだろゝ遂に同行者の注意に由て吹掛の「シガー」を床に捨て、終つた此御方は誰なんめり御自分様だ

伯林の寒氣存外強くないけれども十二月末から一月に掛け一周日斗りは〇、七九十位に下りとうく霧も氷結したけれども室内は存外に温かで早朝でも裸体になつて全身を冷水で拭ふことが出来る天氣も此頃は割合によくなつたけれども日は相變らず短かい朝七時から支度をして「コーヒー」を飲むに之「ランプ」を付けねばならず五時に歸れば己に室内は暗黒だ勿論當時は最も日の短い時で春から夏に掛けては代價的かは知らねど非常に日か長くなるろゝだけれとも大陽年中東より上るとなく又た西に入るとなく頭上に大陽を見るなどは思ひも寄らぬとだろゝ一絶ぬず北方の一隅に居る様だ其筈で地圖を開て玉へ樺太よりも尙一層北方に偏して居るからねー

オペルン、テアテル、寄せ、曲馬の様なものも見たか何れも建物の中々廣大で立派だ棧敷は七八階もあるだろー何れも皇族の見物場が設けて在る「テアテル」は音楽もなく道具立其他日本の壯士芝居の様だ「オペルン」は中々優美だ曲馬の終りに切狂言の様なものをやる其道具立が非常に大業で殊に無慮百人斗りの役者が出る斯く大仕掛に多人數を要する程面白味はない何だか無益な様な心持ちかする僕などは何れの興業物も一度見れば澤山だオペラ、ラアテルの如きは幾月も同じ外題を繰り返へして居ても毎常も満員なのは不思議だ普通一人三乃至六「マーグ」で易いとはない但し食物の用意が不用な丈は便利だ日本の輕業の様なものも曲馬の内に混して居たか中々喝采があつた

「ワイナハト」は年中第一の祭日て日本の正月元日の様なものだ諸官衙諸商店皆休業し所謂「ワイナハトバウム」と云て杉の様な木を葉と共に食堂に建て之れに種々の飾りを付け多數の蠟燭を点し傍らに贈物を供る晩食の八九時頃になると家族及寄宿人共一同禮服で食堂に集り先つ着席して獨乙の君か代を奏し終て互に祝詞を陳べ主人は家族に贈物を分配す日本の年暮と同じだ又主人と寄宿者の間にも贈物を交換す蓋し西洋にては此ワイナハト及誕生日の外には贈物をなさざるを例とすさて此贈物を見て喜

ぶとか非常だ禮義として余り感しないものでも「兼而此品を希望した」とか「恰度自分に適する」とか「驚くべく奇麗だ」とかすべつたとかころんだとか長つたらしく一時闘斗りは各自の得物を相互に披露し恰も日本の子供か贈物を得たときと同様だ、處か小供斗りてなくつて卅以上の大供かやつて居る殊に女か甚しい實にしら／＼しい様だ是れが禮義だろーな僕などは元來こんなとはへたて困るよ

正月は殺風景に年賀を云て一日休むきりさ年始に廻るともなく知人には新年繪はがきか名刺を受ける切りだ僕等は公使の宅に行き日本料理で「シャンパン」を一杯御馳走になつた只變て居るとは大晦日の夜半十二時になると寺々て百八の様なものを打ち之れを相圖に多數の住民殊に中等以下の者か金澤の香林坊の様な廣小路に集り御日出度／＼と云て居る其周圍の町々迄人波を打ちわい／＼騒ぎ立て馬車か女か通ればわい／＼云てひやかして居る此夜は「シルクハット」を被るとを禁してある此禁を侵した者はなぐられ損だろーな多數の巡查か出張して人の立ち留まらないう様に行け／＼歩け／＼と云て居る以て衝突喧騒を避けて居るらしい此集群の氣味は何だか分らないけれども古しは住民か一ヶ所に集て新年を祝し追々無禮講を極めた余弊が殘て居るのではないか

物價は無論金澤よりは高いか東京と大差はなかる—西洋物は所謂唐物類だから本元で廉だろ—と思われるけれどもろ—は行かん硝子類は廉だろ—けれど凡て細工物が非常に高價だ硝子類はとても日本の及ばぬ處で殊に諸商店の表は何間四方でも皆硝子を以て覆ひ其中に商品を陳列し店の露出して居るものは一つもない實に奇麗だ水晶宮の様だ此点は實に羨敷いよ、のみならず商業の發達上に多大の影響があると思はれる、而して最も安いものは「ビール」で日本の半額以下最も高いものは烟草で日本の十倍位だろ—僕は烟草を止める積りて來たけれども未だ飲で居る

交通機關は實に能く發達して居る道路は土を見る處は殆んどない皆「セメント」の様な「アスパルト」若くは石を以て敷きつめて在る繁花な町は皆「アスパルト」たけれども田舎の方は石だ此石の道路を馬車が通る音は非常に騒々敷い途上相互の話などはとても分らん途上斗りてなく日本の様な家の構造なれば家内の談話も分らぬ位だ幸々西洋の家屋は壁が厚いから平氣だ凡て西洋の發達して居る處は敢て西洋人の利口な譯でなく一定の必要から起つたらしい先づ道路の堅固に出來たのは大なる重き車か道路を破壊するより起り（皆車は大にして重く日本の様な小さいのは見たくもない）此車の響きと寒氣其他を防ぐ爲

め家屋を堅牢に造たのではないか是れよりも一層分り易いのは燈火で殆んど晝のない西洋では日本流の種油ではとても仕事か出來ないだから石油となり瓦斯となり電氣となつた譯たろ—日本の如き光明なる國は白中燈火の必要のないあら種油で足りたらしい僕の此の理由適當のものど假定せは日本人は鬼に金棒で十二分の發達か出來ねはならず以て日本人の怠慢を証するに足りはしないか又話が横道に入たが次は電車で「ペンニヒ」均一のものか市内至る處網の如く往來して繁花な町では夥多の電車か行列して居て殆んど何時でも乗れる其數は何百と云ふのだからね—けれども少し慣れないと「トンダ」處に持て行かれてしまう其外多數の乗合馬車がある斗りてなく市街鉄道か三種あつて三分間毎に發車する尙ほ地下電鉄かあつて五分毎に發車するコーユー風だから大抵の處は三分で往復か出來る反て自宅から停車場迄行く時間の方が長いだから一里内外の田舎に住所して居て通學し或は毎食事を伯林に食ひに來るものかある位だけれども凡て此等の交通機關は殆んど停車時間がないから慣れないと上下が甚だ危険だ然のみならず停車場名を呼んで下車を命する様なとこない其代り其地名か澤山に列記して在る米國の如きは乱暴て人の怪我をするのと其人の不注意として居り人の乗る乗らんよ關せずん—發車し線路の

如きは開放して在るろゝな

終りに研究の方針に付て少く書こふ是れは新來者か何れも困るそゝな殊に臨床家か困る様だ未だ三ヶ月の赤ん坊にこんな議論を吐く資格はないけれども余り人の話さないとだから又必要のとだから事の適否は兎も角も目下の考案を將來留學する人の爲めに書て見るも亦一興だろゝ多くの留學生の希望は可成廣く觀察したいと云ふのか普通だろゝろゝすると表面丈に留つて奥の手を見る暇かなくなる奥の手を見るには一ヶ處に入り込まねばならぬろゝすると廣く見る時間がなくなるあちら立てればこちらが立んではれか何れも一番困る点だ普通は一局部に局限して廣く見る人か少い夫れでは財産と生命を儲してはるゝ來た甲斐がないから其中道を取て留學期の一半を廣ろ見に費し其一半を奥の手拜見と出た方がよかるゝと考へる處か廣ろ見にも完全にやるには各地を廻るのと一ヶ箇所を視察するのと二種をやらねばならぬ又何れを先きにするやら定めねばならぬ處て最初は所謂土地不案内て旅行杯に慣れぬから一個所の方を先きにして各地巡回て歸途最後に廻した方がよかるゝ僕が目下の方針は夫れだ其外語學は何をするにも必要で言語の不充分なる最初から夥多の講義を開ても理解か出來ないだから最初先つゝ一局部の奥の手に入り他を顧みない法もある是れには最初

から如何なる物質を研究すると云ふ目的か確定して居らねばならぬ處か多くの臨床家は夥多の慾望を以て居るから容易に定まらない又日本て考へた様に事がすらく運ばない殊に最初は様子お分らないからねゝ僕などは病源病理を研究したい積たが化學の方面に向ふか血清を研究しよゝか尿にしよゝか血液にしよゝか糞便にしよゝか夫れとも矢張組織の方から入り込ふかと色々迷て居るのだ又親切の教授を撰ばねばならぬ處か己に直接指導を受けたい人てなければ其教師の能不能親不親は分らない恰も此の經驗のある人に出遇ふと稀だから類似の希望を有する留學生よ相談するか或は心當りの教授に直接手紙を出して消息子を入れて見るか(遠方なら)若くは直接「クルズス」を取て其やり方を直接實見するのだ又大家の懐に入るのは困難と云ふ譯でもないけれども繁忙でとても世話などはして呉いないろゝだ夫れには基礎醫學の先生は終日教室に同居して居るから相談に便利だ夫れで多くの人は臨床家に行かずして基礎醫學に入り込むとか分つた殊に根本的に醫學を研究するには基礎醫學から入て行かねばならぬそこで話が少しく横道に入たが僕の名案とも云ふべきものは學期の始まる二ヶ月前に到着するのだ最初一ヶ月は地圖片手に市内を毎日見物して廻り傍ら新聞を讀て遊て居るのだすると自然に事情が分り語學の力が

付き後に講義を聞ても早分りがする尙ほ語學の稽古に行けば一層宜布最初はぼんやりして居るから夥多の學科を頭の内に入れるのは無益だ次で第二ヶ月目には二三の休暇實習をやつて學科の興味と教授の能不能親不親を定め次學期から所定の研究室に入り他を顧みず奥の院をさぐり旁二三の研究をなし其仕事の模様でろろく廣見に取掛るのが上策と思ふ、だから冬學期に十月に休暇實習が在て十月末に本者が始まるうら七月初旬に日本を立て八月中旬に着き夏學期は三月に休暇實習を五月に始るから十二月初旬に出て一月中旬に着くのだ但大家は休暇實習をやらぬけれども此實習をやつて居る内に大凡の方針が付て來る譯だ

暇もないのにへたな文章を長つたらしく書て退屈でしよが消息の一般を知人に知らしむるのを樂しみにどうく三晩掛た

○大坂に於ける第二回同窓會開會

(齊藤義雄君報十會宛)

春暖の砌貴會益々御隆盛の段奉賀候、偕て昨冬始めて第一回の會合を開きし京坂神地方に網羅する本校出身者第二回會合を四月二十三日(第三土曜日)午後五時より大坂綱島鮎宇樓に於て舉行仕候、當日來會者は恩師木村博士

を始めとして藤井榮四郎君(日本生命)小島佐藏君(攝津紡績)政山龍雄君(當市開業)佐藤捨三郎君(大坂衛生試驗所、藥)堤泰藏君、堀田圭三君、及手束正胤君の三見習醫官、松村四郎君(府下茨木町開業)森岡總太郎君(當市開業)及小生を併せて十一名、和氣團欒有益なる博士の殊に陸軍豫備病院に於ける實驗談等を拜聽し或は三年乃至四年振りの久闊を談んじつゝ杯を交へて懇談雜話各十二分の歡を尽して同夜十時頃散開仕候、殊に今回は第一回に比し倍數の來會者を得一層の盛會光景を呈し候、尙當日は今後隔月一回に集會を開き有益の談話をなし交情を温むること及今回恩師金子先生の名譽ある醫學博士の學位を得られたるに對し本會一同より祝詞を送る事を決議致し候、

尙本日來會者の筈なり志は猪飼史郎君(當市開業、藥)久保襄一郎君(回生病院)高田範圍君(京都大學)石田他人君(京都大學)山田信之君(神戸病院)前田匡俊君(神戸)富家久男君(見習醫官)の七名なりしも各病氣其他事故のため來會なかりしは甚だ遺憾の事なりき、

右の如き次第にて我同窓會も漸次回を追つて盛會を重ねたく存候坂地附近に居らるゝ我同窓諸君には是非其所在を木村博士の許まで御通知被下らば博士を中心をして此會合を漸時盛大に致度候(下略)

○吉川砥直君通信の一節

(小川教授宛)

新戰場を過ぎて

一

砲火劔戟音絶わて

山河は舊の寂寞を

吹さのみ増さる荒野原

過きては一夜の夢うかし

二

血潮に染みし野邊の草

昨の慘事の名残ころ

魂魄是所に打眠る

ろゝろに人を襲ふ哉

三

子を先立てし老の親

父の死したる幼児や

今夕は閨のわび枕

葉末に露や繁げからん



幾多の犠牲を抱きつゝ、
復して醒風徒らに
修羅叫喚の戦場も

樹蔭に白き墓標
年うら若き健兒等か
荒涼の景鬼陰の氣

背を失ひし若き妹
兄弟亡びし同胞が
迎る夢路の途すから



會告

○三十八年度金澤醫學專門學校十全會
經費豫算書

科	目	豫算額
第一款	金澤醫學專門學校	一、〇三四〇五九
第一項	講話部	一七五〇〇
第一目	大會費	一三五〇〇
第二目	常會及語學部費	二〇〇〇〇
第三目	臨時會費	〇五〇〇〇
第四目	講話材料費	一〇〇〇〇
第五目	語學部大會費	〇五〇〇〇
第二項	雜誌部	四四五四八〇
第一目	雜誌費	四〇八〇〇〇
第二目	通信費	一七六〇〇
第三目	消耗品費	七〇〇〇
第四目	新聞費	一一八八〇
第五目	雜費	一〇〇〇〇
第三項	遊技部	一七九〇〇〇

第一目	秋季運動會費	一四五〇〇〇
第二目	ロンテニス費	三三五〇〇
第三目	フードボール費	〇
第四目	端艇基金	〇五〇〇
第五目	春季運動會費	〇
第四項	劍道部	二二〇〇〇
第一目	寒稽古獎勵費	一二〇〇〇
第二目	春秋大會費	一〇〇〇〇
第五項	柔道部	二二〇〇〇
第一目	寒稽古獎勵費	一二〇〇〇
第二目	春季大會費	一〇〇〇〇
第六項	弓術部	二四〇〇〇
第一目	大會費	八〇〇〇〇
第二目	備品費	一六〇〇〇
第七項	會務費	七二三〇〇
第一目	備品費	一八〇〇〇
第二目	印刷費	〇五〇〇〇
第三目	消耗品費	三七〇〇〇
第四目	雜費	六三〇〇〇
第五目	茶話會費	六〇〇〇〇
第八項	學術實習部	七九六五〇
第一目	藥品材料費	六四七五〇

一四五〇〇〇	三三五〇〇	〇	〇五〇〇	〇	二二〇〇〇	一二〇〇〇	一〇〇〇〇	二二〇〇〇	一二〇〇〇	二四〇〇〇	八〇〇〇〇	一六〇〇〇	七二三〇〇	一八〇〇〇	〇五〇〇〇	三七〇〇〇	六三〇〇〇	六〇〇〇〇	七九六五〇	六四七五〇
--------	-------	---	------	---	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

第二目	備品費	九九〇〇〇
第三目	雜費	五〇〇〇〇
第九項	豫備費	九一〇〇〇
第一目	豫備費	九一〇〇〇
第十項	維持資金へ組入	八一〇〇〇
第一目	維持資金へ組入	八一〇〇〇

〇三十八年度金澤醫學專門學校十全會校外特別會員會費收入豫算書

科	目	豫算額
第一欸	金澤醫學專門學校十全會校外會員會費	五五五〇四一
第一項	校外特別會員會費	四九一六〇〇
第一目	三十八年度會費	二五八六〇〇
第二目	前年度未納會費	一三三〇〇〇
第三目	前納會費	一〇〇〇〇〇
第二項	預金利息	一四八四一
第一目	預金利息	一四八四一
第三項	繰越金	四八六〇〇
第一目	繰越金	四八六〇〇

〇三十八年度金澤醫學專門學校校外特別會員會費支出豫算書

(會告)

(會告)

科	目	豫	算	額
第一欸 金澤醫學專門學校十全會 校外特別會員費	第一項 校外特別會員費		四〇六	四四一
	第一目 雜誌費		二四四	二〇〇
	第二目 通信費		一九六	二〇〇
	第三目 雜費		三八	〇〇〇
	第二項 借入金		一〇〇	〇〇〇
第二項 借入金	第一目 借入金		二五〇	〇〇〇
	第三項 豫備費		二四	四二〇
	第一目 豫備費		二四	四二〇
	第四項 維持資金(組入)		一一二	八二一
第一目 維持資金(組入)			一一二	八二一
			一一二	八二一
○三十八年度金澤醫學專門學校十全會收入豫算書				
第一欸 金澤醫學專門學校十全會	第一項 特別會員寄付金		一、〇三四	〇五九
	第二項 通常會員會費		一一一	〇五九
	第一目 醫學生會費		七五四	五〇〇
	第二目 藥學生會費		六七六	五〇〇
	第三項 利金		七八	〇〇〇
			四二五	〇〇〇

第一目 預金	利子
第四項 綠越金	四二五〇〇
第五項 雜收	一二五〇〇
第一目 物品拂下代	一〇〇〇〇

夫

五月二十五日本會協議會ニ於テ會則中左ノ二條ヲ改正セリ

第三條第三項中職員ノ次へ卒業生ノ三字ヲ加フ
第十二條第三項ヲ左ノ通り改正

將來ノ特別會員ハ最終授業料納付ノ節必ス一時ニ三ヶ年間ノ會費金參圓ヲ納ムヘシ
同條第四ノ次へ左ノ項ヲ追加ス

特別會員ニシテ引續キ三ヶ年間會費未納者ハ除名ノ上會員一般ニ通知ス

(詳細ハ卷末十全會規則摘要ヲ一見アリ度シ)

尙ホ會則第十二條第三項特別會員會費前納ノ件改正ノ結果本年ノ受験生ハ特別會員會費金參圓ヲ七月十日ヨリ二十日マテニ納付スヘント決議

金澤醫學專門學校十全會

○寄贈及交換書目

(六月十五日迄領收之分)

齒學研鑽	六〇一、	富安齒科治療所
藝備醫事	一〇六、七八、	藝備醫學會
藥學雜誌	二七、八、九、	日本藥學會
學友會雜誌	一五、	石川縣師範學校
醫海時報	五二、三、四、五、六、七、八、九、七〇、二、三、	全
醫學中央雜誌	二五、六、七、	全
產科研究會々報	六二、三、	全
婦人科研究會々報	二五、六、七、	全
國家醫學會雜誌	二五、六、七、	全
日本醫事週報	五、四、五、六、七、八、九、三〇、三十一、三十二、三三、三四、五六	全
中外醫事新報	六〇〇、二、三、四、五、	全
東京醫學會雜誌	一九〇、六、七、八、九、一〇、一、	全
東京醫事新誌	一四〇、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、	全
公眾醫事	八ノ四、五、	全
廣島衛生醫事月報	七五、六、七、	全
藥石新報	五〇〇、一、二、三、四、五、六、七、	全
醫事新聞	六八、三、四、五、六、七、	全
校友會雜誌	五、	山口縣立中學校
日本助產婦新報	八五、六、七、	全
臺灣醫學會雜誌	三〇、三十一、	全

好生館醫事研究會雜誌	三ノ一、	全
岡山醫學會雜誌	一八、三、四、	全
大日本私立衛生會雜誌	二六、三、四、	全
中央婦人科學雜誌	二ノ三、四、	全
皮膚科及泌尿器科雜誌	五ノ一、	全
成醫會月報	二七、八、九、	全
助產學雜誌	六、	全
治療新報	三、七、八、	全
日本眼科學會雜誌	九ノ三、四、五、	全
順天堂醫事研究會雜誌	三六、七、八、九、	全
躬行會叢誌	二〇、一、	全
神經學雜誌	四ノ一、二、三、	全
助產之榮	二〇、七、八、	全
產科婦人科學雜誌	七ノ四、五、	全
大日本耳鼻喉科會々報	二ノ一、	全
北辰會雜誌	四〇、	全
衛生談話	五ノ三、四、五、	全
鎮西醫報	九〇、一、	全
北越醫學會々報	一四、六、	全
校友會雜誌	三、七、	全
校友會々報	七、	全
產科婦學雜誌	六、五、六、	全
好生館醫事研究會雜誌	三ノ一、	緒方婦人科學會
岡山醫學會雜誌	一八、三、四、	日本皮膚科學會
大日本私立衛生會雜誌	二六、三、四、	日本助產學協會
中央婦人科學雜誌	二ノ三、四、	全
皮膚科及泌尿器科雜誌	五ノ一、	全
成醫會月報	二七、八、九、	全
助產學雜誌	六、	全
治療新報	三、七、八、	全
日本眼科學會雜誌	九ノ三、四、五、	全
順天堂醫事研究會雜誌	三六、七、八、九、	全
躬行會叢誌	二〇、一、	全
神經學雜誌	四ノ一、二、三、	全
助產之榮	二〇、七、八、	全
產科婦人科學雜誌	七ノ四、五、	全
大日本耳鼻喉科會々報	二ノ一、	全
北辰會雜誌	四〇、	全
衛生談話	五ノ三、四、五、	全
鎮西醫報	九〇、一、	全
北越醫學會々報	一四、六、	全
校友會雜誌	三、七、	全
校友會々報	七、	全
產科婦學雜誌	六、五、六、	全

校友會雜誌 三、

北海醫報 五ノ二、

京都醫學會始末報告

附京都醫學會雜誌 自第一號總目錄 至第三號

校友會雜誌 三、

中央醫學會雜誌 六、三、

同窓會雜誌 一五、

莊內醫學會々報 三、

校友會雜誌 五、

京都醫學雜誌 二ノ二、

靜岡縣醫學會々報 三、

研瑤會雜誌 五、

東北醫學會々報 三、

增訂新纂外科各論前編 一冊

第五回北陸醫學會報告 一冊

○十全會々費領収

金壹圓 (卅七年度一ヶ年分)

金參圓 (自三十七年度二ヶ年分)

金貳圓 (自三十七年度二ヶ年分)

金參圓 (自三十七年度三ヶ年分)

金參圓 (全)

千葉醫學專門學校

北辰病院研究會

一冊全會 殘務委員

東京開成中學校

愛知縣立醫學專門學校

岡山醫學專門學校

京都醫學會

長崎醫學專門學校

仙臺醫學專門學校

下平用彩君

渡孚 貞君

(明治三十八年六月十三日迄)

小西 俊三君

青木 正枝君

谷 中正勝君

池田恒太郎君

中村 惠君

金參圓 (全)

金參圓 (全)

金參圓 (全)

金參圓 (全)

佐々木金子兩教授寫真額製作方へ

寄附金第二回報告

(五月三十一日迄ノ分)

上)

上)

上)

上)

宮崎 稻作君

稻坂 清八君

伊藤 禮二君

濱地藤太郎君

一金壹圓

一金貳拾錢

一金貳拾錢

一金五拾錢

一金參拾錢

一金參拾錢

一金壹圓

一金貳拾錢

一金貳拾錢

一金壹圓

小計金九圓六拾錢

合計金四拾參圓拾錢

右報告候也

明治三十八年五月三十一日

發起人

廣告

故荻野隆光君紀念寫真費決算報告

△收入之部

一金拾壹圓四拾錢也

內譯

一金拾錢宛

- 笹田順二君
- 吉田東秀君
- 田村圓四郎君
- 福岡捨雄君
- 鷺山謙吉君
- 佐野爲明君
- 松井源長君
- 黑田眞岳君
- 來間隆次君
- 英軒二君
- 高橋重二君
- 若澤孝治君
- 上田茂君
- 金平鉄太郎君
- 杉本恒治君
- 折口靜君

寄附金總額

- 建部鈴次郎君
- 草野佐一郎君
- 近藤勇記君
- 谷澤一郎君
- 鈴木實君
- 吉池省吾君
- 彦坂誠一君
- 龜井權六君
- 長谷眞美君
- 杉田治十郎君
- 水上俊君
- 岡田甚英君
- 長澤安弘君
- 庄司正義君
- 福島可輔君
- 窪美一久君
- 田邊傳六君
- 近森村主君
- 牛塚榮太郎君
- 羽田公太郎君
- 小椋正香君
- 久保田保治君
- 山内兔毛君
- 千田常外君
- 小町環君
- 森澤重春君
- 熊西中造君
- 成澤輝一君
- 成田成治君
- 岡村俊照君
- 藤村敬一君
- 須貝璋太郎君
- 甘利昇君
- 小泉永宜君

△支出之部

- 一金貳拾錢宛
- 平原雲新君
- 一金貳拾五錢宛
- 中村德藏君
- 一金貳圓也
- 寫真二枚代
- 一金五拾錢
- 竹ノ額縁
- 一金五拾六錢
- 郵送料
- ×金七圓參拾壹錢
- 差引殘金四圓九錢也
- 雜誌部石版寫真ニ寄附
- 右之通リ決算報告申上候也
- 明治三十八年六月

- 山下銀吾君
- 安田三木君
- 岡田虎介君
- 岩崎勝治君
- 森公平君
- 江村正也君
- 有壁一雄君
- 米澤友造君
- 筧蓮橋君
- 三崎吉太郎君
- 森舜司君
- 四倉重篤君
- 中川喜平君
- 一宮重之助君
- 池田孝吉君
- 吉村一馬君
- 池野清政君
- 城起吾老君
- 西正胤君
- 河野益躬君
- 中野棕一君
- 職員各位
- 山田伊之助君
- 山西島吉君
- 山本重親君
- 村尾純昌君
- 中須熊造君
- 高橋八郎君
- 高橋幸七郎君
- 森清吉君
- 丹羽佐中君
- 島田義一君

- 中村德藏
- 中西島吉
- 中野源一

夏期講習會規則

師範學校、中學校、高等女學校及小學校體操教師並ニ該科志願者ノ爲メ左ノ規則ニ依リ
 夏期講習會ヲ開ク入會希望ノ者ハ來七月二十五日迄ニ左式ノ申込書ヲ本校ニ送附セラル
 ベシ

- 一講習期日 來八月一日ヨリ同二十一日マテ毎日一科一時卅分、午前七時ヨリ始ム但日曜日ハ休業ノコト
- 一講習科目 兵式體操及教練 普通體操 瑞典體操 遊戲又舞蹈
- 一講習料 一科金壹圓五拾錢 二科金貳圓五拾錢 三科金參圓五拾錢 全科金四圓

普通體操

高等師範學校教師 可兒 德
 體操學校教師 高見澤宗藏
 先名助八郎
 瑞典體操 體操學校教師 手島儀太郎
 華族女學校教師 小野泉太郎
 體操學校教師 石橋藏五郎

兵式體操及教練

陸軍將校(現役上) 人名未定
 陸軍步兵(現職) 熊谷久左門
 (陸軍士官學校付) 體操學校教師 黑澤 勇
 遊 戲 體操學校教師 山本祐吉
 舞 蹈 同

一講習會場 日本體育會體操學校
 一科外講演 諸大家ヲ聘シ講習員ニ無料ニテ聽講セシム
 一講習証書 講習員ノ希望ニ依リ之ヲ交附ス實費金拾五錢ヲ要ス

申込書

(紙半紙用)

貴校御開催ノ夏期講習ニ加入シ何々科講習致度講習料相添エ此段
 申込候也

住所 氏名

日本體育會體操學校 御中

明治三十八年六月

東京府荏原郡南品川海岸大井村

日本體育會體操學校

(電話新橋三三三二)

金澤醫學專門學校 十全會會則摘要 (明治三十八年五月改正)

- 一本會ハ本校職員、卒業生、學生及本校ニ縁放アル者ヨリ成リ職員及卒業生ヲ特別會員トシ學生ヲ通常會員トシ本校ニ縁放アル者ヲ贊助會員トス
- 本校職員卒業生及學生ハ總テ本會會員タルノ義務アルモノトス
- 一本會ニ講話部、雜誌部、遊技部、劍道部、柔道部及弓術部ノ六部ヲ置ク
- 一本會一切ノ經費ハ特別會員及通常會員ノ負擔トス
- 本校職員タル特別會員(校内特別會員)ハ會費トシテ相當ノ金額ヲ寄附ス
- 本校卒業生タル特別會員(校外特別會員)ハ會費トシテ一ケ年金壹圓ヲ納ムベシ但シ一時ニ金參圓ヲ納ムル者ハ五ケ年ヲ一期トシ該期間本會發行ノ雜誌ヲ配布ス
- 將來卒業ノ特別會員ハ最終授業料納付ノ節必ス一時ニ三ケ年間ノ會費金參圓ヲ納ムベシ
- 通常會員ハ會費トシテ一ケ年金壹圓五拾錢ヲ納ムベシ
- 特別會員ニシテ引續キ三ケ年間會費未納者ハ除名ノ上一般會員ニ通告ス
- 一本會ノ會計年度ハ毎年九月ニ始リ翌年八月ニ終ル
- 一講話部ニ於テハ毎年一回以上講師ヲ聘シ道義上ノ講話ヲ聽聞シ又隔月一回醫學及藥學ニ關スル講話會ヲ開ク
- 一講話部ニ於テハ特ニ語學會ヲ開クコトアリ
- 一雜誌部ニ於テハ毎年五回醫學及藥學ニ關スル會員ノ演說談話並ニ本校ノ現況、會員ノ動靜等ヲ記載シタル雜誌ヲ發行シテ會員ニ頒ツ
- 一雜誌部ニ於テハ本會所屬ノ圖書ヲ管理ス
- (運動部規定ニ關スル規定摘要ニ畧ス)

投稿心得七則

- 一投稿用紙は中折紙を用ひ必ず楷書たるべし殊に洋字は字體を明かに記入せらるべし
- 一端書洋紙等に認めたるもの又は字體亂雜なるものは總て没書トす
- 一誌上匿名を望まるゝも原稿には必ず住所姓名を記入せらるべし
- 一言の政治に涉り或は德義に背くものは一切登載せず
- 一未完の原稿は採録せず
- 一原稿採否の權は編輯長にあり
- 一一旦寄送せられたる原稿は返戻の請めあるも之に應せず

十全會雜誌部

明治三十八年六月二十一日印刷
明治三十八年六月二十五日發行

編輯兼發行者 石川縣金澤市廣坂通新道二十六番地 森 島 彦 夫

印刷者 石川縣金澤市尾張町八十二番地 宇野孝太郎

印刷所 同 活文堂

發行所 金澤醫學專門學校十全會

電話【六十五番】